そんな日常にあって立ち止まり、振り替えることを肝に命じたい。ＮＰＯ法施行から７年、ＮＰＯ法人は量的な拡大に対して質的な選別と淘汰の時代に入ったといえよう。

スクールサポーター
森　田　進　軍

行きたくなる地域の中の学校づくり

■ プロフィールと活動内容

森田進軍（もりた・すすむ）
2003年まで小学校校務士（28年間校務士をつとめる。持病の悪化に伴い退職。）
2003年より金沢市立鞍月小学校スクールサポーター
2004年同校特別非常勤講師

校務士時代より、主に木工細工デザイナー小黒三郎氏(文末注を参照)のデザインに基づく木のおもちゃをつくり、学校・公民館・児童施設に寄付や貸し出しをする活動を続けている。また不登校になった子どもや障害をもった子どもたちへのかかわりをきっかけに、子どもたちのために組み木づくりや農業体験を実践してきた。現在、木のおもちゃを製作・寄付する活動を続けながら、小学校にて木工のスクールサポーター（図工授業）、カルチャーサポーター（課外活動）をつとめる。

■活動のきっかけ

木工おもちゃを創り始めたのは、宝塚在住の無二の親友から、阪神淡路大震災後に学校に行けなくなった不登校の子どもたちが大勢いること、こうした不登校の子どもたちのために教育総合センターの呼びかけで集まった若者たちによるボランティア・サークルがあることを、聞いたからだ。自分にも子どもたちのために何か力になれることはないかと考えた。たいした事は出来ないけれど何もしないより何かしたい。そのような思いで作ったバランストンボを宝塚の子どもたちに送ることにした。さらに、カブトムシの幼虫を育ててみないかと問いかけてみたところ、普段は自ら何かをしたいとは言わない子どもたちが初めて「育てたい」と応えてくれたとの連絡が入った。このとき子どもたちのために少しでも力になれるということが大いに励みになった。そのことが後の活動につながっている。

■ “農業”体験

その後、自分の勤務した小学校でも障害を持った子や不登校の子どもたちがいることを知った。なんとか子どもたちが行きたくなるような学校にしたい。まずは児童が登校する時に一番先に目に入る場所、玄関を花で迎えようと考えた。

学校には幸い小さいながらも温室があり花苗を作ることは容易であったが、予算がなかった。そこで知人から不要となった畳を譲り受け土作りから始めることにした（こうした取り組みについては学校ごとにその対応に違いがあった。農業体験などにも積極的に取り組もうとする学校もある）。

そんな折、不登校だった子どもが学校へ来ることが出来るようになり、理科委員として好きな植物の世話をすることになり、理科の先生からお世話するよう依頼された。それまで不登校の子どもたちや児童施設の子どもたちに作品を送ったことはあるが、直接かかわった事はなかったので戸惑いもあったが、他の理科委員の子どもたちと一緒に約100鉢の菊を育てることにした。菊を育てるのは本当に大変で、あるときには台風が来るというので私の家族全員で学校へ行き、鉢を校舎内に入れるために走り回ったこともあった。子どもたちと苦労して育てた菊を、転任された教頭さんの所へプレゼントすることができた。子どもたちには大いに自信につながった事と思う。

また、化成肥料の空き袋の底に小さな穴を数個あけ、培養土を入れて、トウモロコシが作れるか、ジャガイモはどのようにできるだろうという実験もした。ジャガイモは底の方に植えて茎の成長に伴い増し土を行った。結果、トウモロコシは一個取れるのがやっとだったけれど、ジャガイモは収穫時に袋をカッターで裂いて水で土を洗い流すと、増し土を施した分だけ地下茎が伸びている様子がよくわかり、よい教材になった。ヘチマを作る棚で小玉西瓜を作り理科委員の子どもたちと食したりもした。

■ 木工細工

子どもたちが行きたくなる学校図書館（あえて「館」と呼ぶ）づくりにも取り組んだ。それまで書棚に置いてあった既製品のぬいぐるみに加えて、案内板や看板を手作りのものに変えることにした。空き教室の一室を作業部屋として使い、木工で焼き色をつけて動物を作った。また電動糸鋸ミシンで文字をくり抜いて板に張り付け立体感のある案内板になるよう工夫を凝らした。

そうした作業を空き教室で続けていると、ある日、同じ階の二年生の子どもたちが「何つくっとる？」「入ってもいい？」と恐る恐る部屋に入ってきた。電動糸鋸ミシンを使い文字を切り出す様子に子どもたちは興味を持ち、「お化けのアッチ、コッチ、ソッチを作ってほしい」とリクエストしてきた。なんの事だかわからないので子どもに尋ねると、絵本（角野栄子作・佐々木洋子絵の「アッチ　コッチ　ソッチのちいさなおばけシリーズ」ポプラ社）を持ってきてこれを作ってほしいという。お安い御用とばかりにその場で電動糸鋸ミシンを使い板を切り出して作った。さらに子どもたちが廃材を自分で持ち帰り、それに機関車を書いて切り出してほしいと頼みに来るようになった。中には先を争うように作業室の掃除をする子も出てきた。

別の学校では、障害を持ち車椅子で通学する子

デザイン：小黒三郎　　製作：森田進軍

デザイン：小黒三郎　　製作：森田進軍

デザイン：小黒三郎　　製作：森田進軍

デザイン・製作：森田進軍

どもたちがいることを知った。一見コンクリートの冷たさが漂う校舎の雰囲気を、木の温もりで少しでも変えたいとの思いで、クラス表示のプレートを木の動物たちに変えてみた。今日は1年生、明日は2年生…と毎日プレートが新しくなっていく。子どもたちは興味津々で自分のクラスはどんな動物になるのだろうと話しかけてくる。そのうち廊下を花で飾る係の子どもたちが、自分たちの看板を作りたいと言い出し、放課後いっしょに作ることになった。

■ 行きたくなる学校

持病の悪化とともに働き続けることが大変になっていった。病気を理解できない無知から来る差別的発言を、教師から受けることもあった。ほかでもない学校という場所で投げかけられた言葉にとても傷つき悩んだ。しかしそれ以上に心配なことは、子どもたちも同じように、大人の不用意な言葉に傷ついているのではないかということだ。大人の自分がこれだけ傷ついた言葉なのだから、子どもにとってはどれほどの傷になるだろうか。子どもたちが不登校になる原因にはさまざまなものが考えられるし、理由はひとつではないかもしれない。しかし、人を思いやる気持ちのない言葉に傷つき、不登校になる子どもたちがいることも事実である。

園芸や農園、そして木工細工に触れたり木工おもちゃを作ったりする事は、子どもたちにとって確かに癒しとなっている。「行きたくなる学校づくり」は、校務士時代よく口にした言葉であった。だが、一度傷つき不登校になってしまった子どもが再び学校へ行きたくなるためには、やはりよき友人に恵まれることが必要である。学校に出来る事はその環境づくりときっかけづくりにすぎない。今の子どもたちはもっと遊べばよいのにと思う。遊びから学ぶ事は多いはずなのに、遊びの中から学びを発見していくという環境に、今の子どもたちはおかれていない。

現代の子どもたちは、与えられることに慣れ、与えられることの中でしか何かできないような環境にあるが、木のおもちゃは子どもたち自身の創作意欲をかきたてる不思議な魅力があるようである。中には自分で切り出したいという子も出てきた。組み木にはパズルの要素もあり子どもたちが自分で考えながら遊ぶことができる。また木に直接ふれることで木目や木の種類を理解し、木のおもちゃになる前の木そのものの性質などについて学習することにつながり、子どもの「もっと知りたい」という気持ちを引き出すことができる。

■ 地域の大人たちが学校にかかわること

退職後は病気の身で思うように働けないが、自分に今出来ることを考えてみると、やはり、子どもたちが木切れに絵を描いてとても嬉しそうに持ち帰る姿が浮かんできた。そこで、自宅に電動糸鋸ミシンを買い求め、廃材で小黒三郎さん(文末注を参照)デザインの動物たちを切り出し、小学校の子どもたちにプレゼントする取り組みを始め

ることにした。

こうした取り組みを続けていくうちに、活動を理解してくださる人がちらほらと現れ始めた。金沢市大野町から依頼があり「もろみ蔵」で作品展を2週間行ったほか、金沢市金石の「銭屋五兵衛記念会館」からも依頼があり1ヶ月の作品展を行った。

こうした物づくりを始めて、学校では味わった事のない多くの親切な人々の存在に気付かされることになった。「よかったら使ってほしい」と木材を提供していただいたり、機械を貸していただいたりしている。また、面識のない方から「父親の工具や機械をもらってほしい」というご厚意を受けてもいる。

さらに、地元小学校からは月に一度カルチャー（課外活動）で木工を受け持ってくれないかと依頼があった。木の温もりを伝えたい、そしてわずかな廃材からでも作品が作れることを知り、自ら体験する事を通して物を大切にする心が芽生えることを願って引き受ける事にした。そうした経験からスクールサポーターとして図工の授業時間に子どもたちに木工を教えることになった。だが授業となると苦心することも多い。手を貸すと授業は早く進むが果たしてその子の為になるのか自問自答の連続である。

地域のちょっとした技術や技能を持った人たちが課外活動や授業にかかわる事は、子どもたちにとって地域の大人との新鮮な出会いとなり緊張感や大きな好奇心を持ちながら学ぶことになると思う。地域の人たちがそれぞれに出来る事（趣味・特技や仕事で得た知識など）を通して子どもたちや学校にかかわっていくことが、地域の人と人とのコミュニケーションを生み、顔の見える地域への変化を促す。自身の子どもが通っていようがいまいが、大人が学校に継続的にかかわることを通して、地域全体で子どもを見守り育てることにつながってゆくのだと思う。

「いいことだとは分かっているが、人材がいない」という声も聞くが、本気で探しているのだろうかと疑問に感じることがある。何も高い技能を持つ人だけを求める必要はなく、地域の大人たちができる範囲のことでサポートし、子どもたちは身近な先輩たちから学んでゆくことが理想的な姿ではないだろうか。

■ 教育の現場が変わること

教師自身が常に学び続けることが重要だが、悲しいことに教師によって学ぼうとする姿勢の差が大きい。教育はすぐに結果が出るわけではないから、それにかまけて教育者たちは努力を怠ってきたのではないか。そのつけがまわり、教師間の力量にも差が生まれてきているように思う。教師の能力の差が生まれているのに、年配の教師も若い教師を育てようとしなくなってしまった(これは主任制の問題から教師間にゆがんだ構造が生まれているせいだと考えている）。教師が昔よりも忙しくなっている事は事実だが、教師と子どもたちが触れ合う姿を目にすることが少なくなり、子どもに目が向かない教師も増えている。だが子どもたちの方は大人が思っている以上に敏感で、教師

金沢市立鞍月小学校木工カルチャーの風景

の事もよく見ている。

また、一人の教師が多くの教科を教えるよりも、それぞれに専門の授業をしたほうがよい面もあるのではないかと思う。これは子どもが多くの大人と接する事にもつながる。さらに、特殊学級を受け持つのが一般の教師という事にも限界があると思う。教師は常に手探りの状態にあり、専門の教師が必要であると思う。

地域の大人たちがかかわりながら子どもたちを見守り、教師が子どもたちを育てることに最大限の協力と努力を惜しまない。学校がそのような場所になることを願ってやまない。

注　小黒三郎氏（遊プラン木工細工デザイナー。盲学校勤務時より木工デザインを手がける。
遊プランURL　http://www.u-plan.co.jp/　）

金沢市立西小学校教諭
松　村　一　成

子どもと育ちあう地域
～「天保義民」についての総合学習の実践をとおして～

1．天保義民を受け継ぐ

金沢市内にある駅西中央公園に写真①のような碑がある。「天保義民の碑」と書いてある。

写真①

———江戸時代天保の頃、西念（さいねん）村(現在の金沢市西念町)などに、米の見立ての時に、加賀藩の役人が一番取れ高の多い田んぼを見て、それを規準に年貢を決めた。それはひどすぎる、真ん中の田んぼを見てくれと願い出たのに、それはならぬと言って、異議申し立てをした百姓の家族100名以上が五箇山に流された。流された人々は五箇山で10年暮らし、西念村に帰ってきた。その間、流された人々の田んぼや家を村の人たちが守っていた———。

このような出来事が西念村にあった。後の明治時代に「天保義民」と称するようになり、現代まで伝えられている。児童文学作品として『天保の人びと』『五箇山ぐらし』『雪の人くい谷』という三部作を、かつおきんやさんが書いている。

６年生が総合学習で「天保義民」について学習し、劇で表現する取り組みを始めて、今年で６年目になる。

今年も新年度になって早速６年生と話し合った。昨年の６年生は、事件が起きてつかまって、五箇山へ流されるところまで劇にしていた。それで、今年は、その後どうなったのかということについてやりたいと意見が一致して、続「天保義民」をしようということになり、11月29日に向けて、劇をしようということになった。

2．劇で伝えたいこと

子どもたちは、かつお作品三部作を読み、碑を調べ、分からないところは、子孫の田中さんや、

写真②　かつおきんやさんと子どもたち